

肉食獣再導入問題をめぐって

石城謙吉¹・中川元²

1. 059-1502 北海道勇払郡早来町北進, 北海道大学名誉教授, しれとこ 100 平方メートル運動地森林再生専門委員会座長
2. 099-4113 北海道斜里郡斜里町本町 49, 斜里町立知床博物館

Subjects Surrounding Carnivore Reintroduction

ISHIGAKI Kenkichi¹ & NAKAGAWA Hajime²

1. Professor Emeritus of the Hokkaido University, Chairman of the reforestation specialty committee of 100 Square Meter Forest Trust, Hokushin, Hayakita 059-1502, Japan. *k-ishigaki@coral.plala.or.jp* 2. Shiretoko Museum, Honamchi 49, Shari, Hokkaido 099-4114, Japan. *hajime-n@apost.plala.or.jp*

Since 1997, 100 Square Meters Forest Trust, a national trust began in order to restore old growth on formerly cultivated land, has examined the reintroduction of extinct animals. Two species of carnivore, wolf, *Canis lupus*, and otter, *Lutra lutra*, has been chosen as mammals to reintroduce. For their restoration, it will be necessary to procure same species from another country as they have disappeared from Hokkaido. Subjects surrounding carnivore reintroduction include: the influence on livestock industry and fishery, risk to man and possibility of their reestablishment in present Hokkaido. The signification of carnivore reintroduction in our time were discussed, with study of precedents from foreign countries.

はじめに

しれとこ100平方メートル運動が、昭和52年(1977)の立ち上げ以来20年間の活動を踏まえた新たな展開として平成9年(1997)にスタートさせた「100平方メートル運動の森・トラスト」は、この運動の趣旨である原生的自然の復元にいよいよ本格的に歩み出そうとするものであった。

そのスタートと同時に設けられた森林再生専門委員会は、さまざまな森林再生作業に取り組むと共に、原生的自然復元の一環として、かつてはこの地域に生息していたと思われるが現在は見られなくなっている絶滅種の復元をとりあげた。その第一次の対象生物としてとりあげたヤマメ(サクラマス)は、平成11年(1999)以来復元計画が進行中である(しれとこ100平方メートル運動地森林再生専門委員会 2003a)。

その一方で、森林再生専門委員会は、これに次ぐ第二次復元生物の検討を進めてきた。その結果選ばれたのは、シマフクロウ、オジロワシ、オオタカ、クマゲラ、マダラウミスズメの5種類の鳥類とオオカミ、カワウソの2種の哺乳類である(し

れとこ100平方メートル運動地森林再生専門委員会 2003b)。このうち5種の鳥類は、いずれも環境省のレッドデータブックに記載されている稀少種であるが北海道全域で絶滅したものではない。

しかし哺乳類としてとりあげられたオオカミとカワウソは、北海道全域ですでに姿を消した絶滅種である。したがってその復元を実現するためには北海道以外の地域からの再導入が不可欠となる。だが絶滅種、とくに肉食獣の再導入には検討すべき多くの課題があり、また北海道全体に関わる問題でもあることから、いうまでもなく、今後広範な論議が必要である。

そこで、今後の論議の足がかりとして、ここでは絶滅肉食獣の再導入について、その意味と課題等について述べることにしたい。

肉食獣との共存の可能性—ヒグマとオオカミ

世界自然遺産の候補地に推薦されて以来の“知床ブーム”の中で、昨今知床のヒグマの生態が頻繁に新聞やテレビで報道されている。その中で目を引くのは、番屋の周辺を歩き回るヒグマのすぐ

そばで平然と仕事をしている漁師の人たちの姿である。今昔の観を深くしないではいられない。開拓期以来、北海道の自然の中で人間にとってもっとも恐ろしい存在だったヒグマが、ここでは人との共存の道を踏み出しているのがわかるからだ。知床半島が国立公園に指定された1960年代の頃を思い返してみても、人里に姿を現したヒグマは必ず殺されていたものだった。

いうまでもなく、これは知床のヒグマが特別に温順な性質のものだからではない。近年一貫して続けられてきた関係者と地元住民の努力、すなわち無用に彼らを刺激しないことや、人に近付き過ぎたクマへのゴム弾、轟音玉による追い払い、さらに観光客のえさやりの禁止などによって、人間とヒグマの間に相互不可侵のルールが徐々に築かれてきた結果である。それはまだ完成されたとは言えないにせよ、近代文明社会の人間と大型肉食獣が狭い地域内での共存を実現しつつある、日本列島では初めての事例と言ってよいだろう。そして、それは今や北米のイエローストーンやアラスカの事例にも優に比肩し得るものになっていると言ってよい。

しかし、ではかつて北海道に生息していたオオカミをもう一度復活させられないか、ということになると、これには少なからぬ拒絶反応があるようだ。オオカミにはヒグマ以上に邪悪で凶暴なイメージがあり、それは童話などにも表れていて、クマは善良な力持ちとして描かれることがあってもオオカミが善玉として登場することはない。

だが家畜は別として、人間に対する危害に限ってみれば、オオカミがまだ生息していた時期の北海道で人間がオオカミに襲われた事例はない。また先住民族のアイヌにとってもオオカミは害獣ではなく、むしろシカ猟にたけた尊敬すべき神(ホーケルカムイまたはオオセカムイ)としてみられていた。さらに和人との長い歴史を持っていた本州以南のニホンオオカミの場合も、17世紀に日本に狂犬病が入って以降の狂犬病罹病個体によるものを除けば、彼らが地域住民に忌み嫌われていた形跡はない(平岩 1981)。逆にイノシシやシカの害から作物を守る神として祭られたり、集落の周辺に彼らのための餌付けなども行われたりしていたことが明らかにされてきている(守山 1988)。したがって本州以南(ニホンオオカミ)、北海道(エ

ゾオオカミ)とも、オオカミと日本人の間にはもともと敵対関係はなかったとみて間違いない。それが凶悪な猛獣とみなされるようになったのは、一つには欧米人のオオカミに対する見方が持ち込まれたためではないかと思われる。また、北海道のオオカミが害獣として絶滅に追いやられたのは、開拓の始まりと共に和人の持ち込んだ家畜への被害のためだった。

人間に対する本来の凶暴さ、危険さという点では、現在知床半島で人との共存の道を歩み始めているヒグマは、オオカミと比較にならないものである。北海道の開拓史には大正12年の石狩沼田における7人殺傷事件、同14年の苫前における10人殺傷事件などを始めとするヒグマによる多くの凄惨な記録が残されている(犬飼 1947)。しかもヒグマによる人身事故は近年も後を絶っていない。また、家畜に対する被害も開拓期から今日まで続いている。だが、そのヒグマに対して、北海道では今保護対策が進められ、中でも知床半島では人間ときわめて近い距離での共存が実現しようとしているのである。では、人間との共存の道を探られることがまったくないままに絶滅に追いやられた、北海道のオオカミと人間の共存を再現することは果たして無理なことなのか。

大型肉食獣の復元運動—世界の動向

近年、世界の各地で“絶滅種の復元”の運動が進められている。ある地域で絶滅してしまった生物を、まだ生き残っている他の地域から再導入して復活させようとするものである。

たとえば鳥類では、イギリスのスコットランドで、狩猟やコレクターによる卵採取で20世紀初頭に絶滅してしまったオジロワシをノルウェーから再導入して復元する運動が1956年から始められ、これはすでに成功している(Love 1988)。哺乳類についてみると、Reading & Clark (1996)によれば、ヨーロッパではオオヤマネコの再導入による復元が1970年代以降ドイツ、オーストリア、スイス、フランス、スロベニアなどの諸国で取り組まれてその多くが成功しており、またオーストリアでは1992年にヒグマ、イギリス東部ではカワウソの再導入も行われている。そのほかスコットランドでは1994年頃からオオカミ復元のための運動が保護団体によって進められているようである。

一方北米大陸でも、オオカミ、アカオオカミ、カナダオオヤマネコ、ボブキャット、フィッシャーやカワウソなどをはじめとするさまざまな哺乳類の絶滅地域への再導入が進められてきている。これらの早いものは1950年代に始められているが、大半はヨーロッパの場合と同様に1970年代以降である。また哺乳類の再導入はアフリカでも行われており、1980年代以降ライオン、ヒョウ、チーター、リカオンやハイエナなどの絶滅地域への再導入が各地で試みられている。

こうしてみると、地域で絶滅した動物の再導入による復元は、現在世界の各地で行われつつあることがわかる。しかもそれらの多くは1970年代以降に行われるようになってきている。これは近年自然の荒廃による生態系の破綻や生物多様性の喪失が、世界的に憂慮されるようになったことと無縁ではない。また、再導入の対象となっている動物の多くが肉食性のものであることは、肉食獣が食物連鎖の上位にあり、乱獲や自然の荒廃の影響をもっとも強く受けて絶滅しやすいためとみてよい。

こうした海外の動向に対して、日本では国内産の個体が絶滅したトキを復元させるために中国から導入した個体の人工繁殖が佐渡トキ保護センターで進められているのはよく知られている。しかし現在のところ、自然への復元の用途はまだ立っていないようである。また1993年には日本オオカミ協会が作られてその活動目標にオオカミの復元を掲げている。しかし科学的な検討はまだ行われておらず、さらに本州以南の地域で絶滅したニホンオオカミは特殊な固有形態のものであったことから、それに代えて外国産のオオカミを持ち込もうとの考えには疑問の声も出されているようである。

日本ではこれまでのところ、絶滅危惧種、危急種の保護への取り組みはそれなりに進められるようになりつつあるものの、絶滅動物復元への動機は極めて乏しい状態にあると言ってよい。

肉食獣再導入の意味—なぜ、「猛獣」の復元なのか

ところで、こうした絶滅動物の再導入には、どれも事前の準備と社会的論議に多大の労力と時間がかけられている。1989年から91年にかけてカナダから合計83頭のカナダオオヤマネコを再導入したニューヨーク州のアディロンダック国立公園の

場合にはそれに向けた論議と準備のために10年が費やされ、1987年にノースカロライナ州のアリゲーター川国立野生動物保護地域にアカオオカミの再導入が実現するまでも1973年以来14年にわたる努力と曲折が重ねられている(Reading & Clark 1996)。1998年にオオカミが再導入されたアリゾナ州では事前に90回におよぶ公聴会が開かれた。また1995年にカナダからオオカミを再導入して現在その定着が実現しているイエローストーン国立公園の場合は130回にわたる公聴会が持たれたが、近年になってもこれに対して近隣の牧畜業者から訴訟が起こされたりしている。

これは、再導入の対象となった動物が肉食獣、それも生態系の食物連鎖の頂点に立つ大型肉食獣だったために、人畜への危害が問題となったからだ。中でもその代表とも言えるオオカミは、長い歴史を通じて人間、とくに欧米人から家畜の害獣として長く憎悪の対象となってきた過去がある。

では、なぜそうまでしての大型肉食獣の再導入なのか。その第一は、いうまでもなく本来の生物相の復元にある。しかも、それは単なる“欠員の補充”ではない。自然界における肉食獣の役割の見直しからきている。大型肉食獣は自然界の食物連鎖の頂点に立つ「ターミナルアニマル」である。したがって彼らは地域の生物群集全体に直接・間接の影響をもつものと言ってよい。そのターミナルアニマルを失った結果として起こるのは、生物群集の中の特定の種の異常な増殖や減少といった自然の歪みである。その典型的な例が、現在の知床一帯の自然と言ってよい。絶滅を免れて徐々に数を増やしてきたエゾシカが、重要な捕食者であったオオカミがいらない中で昭和60(1985)年頃から大増殖を始め(岡田ら2000)、それによって森林内の稚・幼樹が食い尽くされるようになり、さらに近年では大径木の樹皮食いが広がっているほか、ニワトコ、マユミ、ツリバナやガンコウランなどのエゾシカが嗜好する植物の絶滅も今では心配されている(石川2005)。

大型肉食獣復元の狙いの一つは、このような自然界の歪み、乱れを正して本来のバランスを取り戻させることにある。むしろ肉食獣を放したからといってその効果は特効薬のような形でただちに現れるわけではない。しかし1926年に絶滅したオオカミを1995年に再導入してその定着に成功した

イエローストーンの例では、オオカミ絶滅以来高密度状態になっていたエルクなどの大型シカ類やコヨーテの数が減少し、草本植生の回復や小型哺乳類の増加などが見られるようになってきている (Smith et al. 2003)。また草食獣に対する直接の捕食効果以外にも、オオカミの復活以来エルクなどが以前ほど長く河畔林に滞留することがなくなった結果、河畔林のハコヤナギが回復したことなども最近報告されている (Beschta 2003; Ripple & Beschta 2003)。

しかし大型肉食獣復元の取り組みの動機は、こうした生態系の健全化以外の動機だけではない。それは失われた肉食獣に寄せる畏敬と愛惜の念からもきている。ターミナルアニマルは、自然界の冠とも言うべきものである。大型猛禽類や肉食獣に対して人は古くから家畜を奪われることへの憎しみや人命を脅かされる恐怖心を持つ反面で、彼らの強さ、美しさに敬意と憧れを抱いてきた。彼らは人間が自然に寄せる畏敬の念の象徴でもあったのである。今世界各地で取り組まれている絶滅動物の再導入運動は、生態系の頂点に立つ自然界の冠たる彼らを復元することによって自然への畏敬の念を再び呼び戻そうとするものでもあったと言える。

絶滅の経過－北海道のオオカミとカワウソはどうして滅びたか

かつて北海道に生息していたオオカミは、本州以南にいたニホンオオカミとは別系統の北方系の大型亜種でエゾオオカミと呼ばれ、氷期に陸橋でつながっていた沿海州、サハリン経由で北海道に渡来したものとみられている。明治初期における捕獲記録から見て彼らはほぼ全道一円に分布していたとみて間違いはない。

しかしこのオオカミに対して、先にも述べたように先住のアイヌ民族が恐れたり敵視したりしていた形跡は、いろいろな伝承からみても全くない。だが明治以降和人による農業開拓が始まったときからオオカミと人間の関係は一変した。各地でオオカミによる家畜被害が発生したからである。中でも日高の官営新冠牧場では農耕用の繁殖馬がほとんど全滅する被害が起こったことが知られている。そこで明治9 (1876) 年には開拓使庁で対策会議が開かれ、ここで採択されたのが開拓使顧問

エドウィン・ダンの献言だった。ダンは当時オオカミによる牧畜被害が多くその撲滅運動が進められていたアメリカの例から、ストリキニーネによる毒殺が効果的であること、また捕獲者には奨励金を支給することを薦めたのであった。こうして翌明治10 (1877) 年から全道的なオオカミ駆除が始まり、それは明治21 (1888) 年まで続けられた。この間に奨励金の対象となった捕獲数は1,539頭である。この他に開拓使庁による直接駆除も合わせると、捕獲総数はおよそ2,000頭とみられている。これによってオオカミの被害は一気に終息し、その後明治29 (1896) 年に函館の毛皮商が数枚の毛皮をアメリカに輸出したとの記録を最後に、北海道のオオカミの消息はすべて途絶えている (犬飼 1975)。

しかしこのあつけない絶滅には、主食であったエゾシカの激減も絡んでいたと思われる。エゾシカはアイヌにとっても重要な生活資源であり、彼らはさまざまな猟法でエゾシカをとって暮らしていた。しかしそれは狩猟民族に特有の生活のために必要な分だけをとるものだったために、長年にわたる彼らの狩猟によってエゾシカが絶滅に瀕した形跡はない。ところが明治になって登場した和人たちは、狩猟民族と違って自らの衣食源としてではなく、主に皮や角の商品価値に目をつけてのエゾシカの大量捕獲を始めた。それは明治8 (1875) 年頃から急増し、年間10万頭を越える捕獲が続けられている。しかしこの乱獲に加えて明治11 (1878) 年に北海道を見舞った豪雪による大量斃死が起こった頃からエゾシカは急激に減り始めた。その結果明治20年代には絶滅が心配されるに至って同22 (1889) 年に禁猟の措置がとられている。その後明治33 (1900) 年に禁猟は解除されたが減少はさらに著しく、大正9 (1920) 年に再び禁猟になった時点ですでに絶滅したとみなされる状態になっていた。こうしてみると、明治20年前後における北海道のエゾオオカミの絶滅には害獣としての駆除と主食であったエゾシカの乱獲による消失という二重の人為が絡んでいたと考えられる (石城 1983)。ただ、こうして絶滅したと思われたエゾシカは昭和17 (1942) 年になって日高と置戸の山中で生き残りが発見され、それが回復して今日に至っている。

一方のカワウソは、エゾオオカミの場合と同様

本州産のものとは別のユーラシアカワウソの系統とされているが、これもかつては全道一円の低平地帯の河川流域、湿原、湖沼等に生息していたとみられている。しかしカワウソに対しても明治以降和人による高価な毛皮に目をつけての狩猟が行われるようになったことから、その数は急激に減少した。捕獲頭数は明治39(1906)年には273頭、大正5(1916)年には17頭、同9(1920)年には9頭となり、昭和3(1928)年に全国的にカワウソが禁猟になった時点では北海道ではすでに絶滅していたものとみられている。しかしカワウソの場合も絶滅の原因となったのは乱獲だけではない。明治以降北海道全域で進められた農業開拓と各種の開発行為がカワウソの生息地であった低平地帯でとくに大規模に進められたために、彼らはそのすみ場所を失ったのである。

再導入のための自然条件はあるかー北海道の現状と今後

地域で絶滅した生物の再導入を考える場合に、最初に問題となるのはその種が再導入されても再び定着できる条件があるか否かである。その種を絶滅に追いやった条件がそのまま残されている限り、復元の成功はあり得ない。

では、オオカミやカワウソが再び定着し得る自然条件が現在の北海道にあるか否か。北海道のカワウソを絶滅に追いやったのは、先にも述べたように毛皮目当ての狩猟と、開拓によって低地の流域の自然が消失したためである。このうち狩猟は上に述べたように昭和3(1928)年以来禁猟となって現在に至っている。しかしかつてのすみ場所であった低地の流域は今日ではほぼ開発し尽くされており、さらに戦後の昭和30年代後半(1960年代)からは護岸工事による河川の人工改修やダム建設が全道に進められていて、流域の自然条件は絶滅当時と比べても比較にならぬほど悪化している。

カワウソが生息するためにはすみ場所となる河畔域の自然と豊富な淡水魚の存在が不可欠である。したがって現状で見える限りは北海道でのカワウソの復元はきわめて困難なものと言わざるを得ない。しかし絶滅種復元の取り組みは、もともと自然環境が破壊された現状を肯定するところから始まるわけではない。そうしたことからみると、現在道東の釧路川と標津川で環境省、開発局が進めてい

る自然再生運動はきわめて重要なものと考えられ、このような試みが今後斜里川などを含む他の河川にも広げられることが期待される。さらに知床半島には、半島の根元にあたる斜里川を除いてはカワウソの一般的なすみ場所とされる低地流やそれを取り巻く湿原などはないものの、人間の立ち入ることの少ない海岸線と沿岸の魚貝類に恵まれている。今後は、こうした海岸域も含めて、定着の可能性について調べて行くことも課題と考えられる。

一方オオカミについてみると、北海道は現在も全面積の7割にあたる560万ヘクタールの森林を維持している。そのうち150万ヘクタールは人工林化され、また天然林も戦中・戦後の過伐によって著しく荒廃してはいるものの、森林面積自体は戦前以来基本的に変わっていないのである。さらに、狩猟と並ぶ大きな絶滅要因だったエゾシカの激減も現在では大きく状況が変わっている。絶滅を免れたエゾシカは、かつての捕食者であったオオカミの不在と禁猟措置のもとで戦後一貫して全道的に増加を続け、その結果今日では農業と林業に多大の被害をもたらすまでになっている。森林再生専門委員会における第2次復元生物の検討の中でオオカミが取り上げられた背景には、運動地を含む知床一帯でのエゾシカの異常増殖を如何にして抑制するか論議もあつたことだった。こうしてみると、さらに検討すべき点はあるものの、北海道にはオオカミ復元の可能性は、自然条件の面では少なくないと言ってよいと考えられる。

なお、カワウソ、オオカミの再導入を実現する場合の導入個体については、カワウソはサハリンに、またオオカミは沿海州地域に、それぞれ北海道にいたのと同系統とみなされるものが生息している。

再導入の社会的条件ーコンセンサスと法整備

オオカミが絶滅したと思われる明治20年頃の北海道の人口は30万人余りだった。それが現在では570万人前後に増大し、首都札幌の人口は180万人を越えている。現在も全面積の7割近いおよそ560万ヘクタールが森林として残されているとはいえ、北海道は今や完全に文明社会の中にある。加えて、乳牛・肉牛を合わせて128万頭の牛、農耕馬・軽種馬を合わせて約2万5千頭の馬が放牧

されている（北海道統計協会 2005）。また、各地の湖沼では内水面漁業が行われ、湧水域ではニジマスなどの養殖事業も営まれている。

こうした島への肉食獣の再導入は、人への危害や一次産業への被害などを始めとする社会的影響についてのとくに慎重な検討と道民のコンセンサスが不可欠なのは言うまでもない。先にも述べたように、オオカミ、オオヤマネコなどの大型肉食獣の再導入に取り組んだ欧米の諸国では多大な労力と長い論議によって得られた社会的同意のもとに初めて実現に漕ぎつけている。

オオカミによる人身被害についてみると、オオカミが生息していた時期の北海道には先にも述べたようにその記録はない。また記録に残るヨーロッパや北米での事例も狂犬病の罹病個体やイヌとの交雑個体などによるものにはほぼ限られていることが今では明らかになっている。ただ、インドなどの一部地域では現在もしばしば人身被害が起きている事が知られている。このような地域による違いは、住民の生活様式やそれによるオオカミとの接触の違いからきているものと思われる。それはオオカミとの間にどのような“ルール”が歴史的に結ばれてきたかによるとみてよい。したがってオオカミの再導入に関する論議は、こうした事実をふまえて人間との共存の可能性を検討する必要がある。また、オオカミがきわめて学習能力の高い、優れた社会性を持つ動物であることも考慮されるべきである。

しかし、一定の家畜被害は予測されることから、それがどの程度のものか、その被害を社会的にどう補償するか、また被害を最小限に抑えるためのオオカミの個体群管理をどのようにするか等について、欧米の現状を参考にして検討する必要があるだろう。

その点ではカワウソも同様である。現在のところ、日本には絶滅種の再導入に関する法的整備は進められておらず、むしろ再導入した肉食獣による家畜被害への補償体制なども全くない。したがって、オオカミ、カワウソとも再導入は法的にはまだ保証されていない。

だが、問題は、今直ちにこれを行なえるか否かではない。肉食獣を含む絶滅種の再導入による復元の意義を社会が認め、そのための取り組みを始めるか否かが問題であり、そのための法整備、人

身事故の防止体制や家畜被害などへの補償体制をどう整えるか否かが現在の課題なのである。すでに各地でオオカミの復元を実現しつつあるアメリカでは、それに先立つ1966年に絶滅危惧種条例が制定され、翌1967年には米国動物学会で初のオオカミシンポジウムの開催や民間のオオカミ団体の結成などがあり、さらに1973年に米国絶滅危惧種保護法が成立し、米国魚類野生生物局によって全米のオオカミの3亜種とアカオオカミについてそれぞれ回復チームが任命されている（Mech 1995）。絶滅動物の復元には、こうしたステップが不可欠である。

ここでさらにつけ加えるならば、地球上における今後の人と自然の共生は自然が完全に無害化されたことを前提とするものではないという認識も必要だろう。

なぜ、知床からなのか

オオカミとカワウソは、すでに北海道全域から姿を消した動物である。したがってその復元はもとも北海道全体の問題として論議すべきものと言える。それにも拘らずしれとこ100平方メートル運動という、知床半島の限られた地域に関わる自然保護運動が彼らの復元の論議を立ち上げたのは何故か。

しれとこ100平方メートル運動の対象地である斜里町岩尾別地区は、大正初期に開拓の手が入って原生林が伐り開かれた地域である。しれとこ100平方メートル運動は、いったんは森林を失ったこの土地を再び本来の原生の自然に戻すことを目標に、ナショナルトラストとして立ち上げられた。それ以来続けられている森林再生の仕事が進むにつれて、ここには本来の生息種である各種の哺乳類や鳥類が戻ってくるのが期待されている。しかしオオカミとカワウソは北海道全域で絶滅した動物であり、再導入という人為的手段なしには復元は望めない。

これまでの遺跡調査の結果によると、羅臼の知円別南岸遺跡やオタフク洞窟遺跡からはカワウソの骨が出土しており（佐藤・上 1999；西本・佐藤 1991）、また斜里側のオクシベツ遺跡からはオオカミの物と思われる基節骨が発掘されている（小林 1980）ことから、彼らが知床半島一帯の地域に生息していたと考えて間違いはない。

歴史的に考えれば、岩尾別地区を含むこの地域の原生林が失われたこととオオカミ、カワウソの絶滅は、時代の違いはあるものの、ともに北海道開拓の過程でおきた歴史的な事件である。しれとこ100平方メートル運動による岩尾別地区の森林回復運動が、その土地で繰り広げられてきた人間と自然のかかわりの延長線上にあると同様に、オオカミやカワウソの復元もまた、北海道開拓によって改変され、失われていった自然と、人間との関わり延長線上に置くものと位置付けられる。現在、旧開拓地を本来の自然に戻す試みが行われているのは北海道で知床のみである。こうした100平方メートル運動地の社会的立場から見て、この地からオオカミ、カワウソの復元の試みが進められることは歴史的な意味があると考えられる。

また、前にも述べたように、日本の自然保護運動の中で「復元」を目指す運動はまだ歴史が浅い。その中で昭和52(1977)年にスタートしたしれとこ100平方メートル運動は先進的な役割を果たしてきた。また、運動参加者が全国的な広がりを持っていることもこの運動の大きな特色である。自然の復元は息の長い仕事であり、その成果の確認や評価にも長い年月を要する。また、オオカミやカワウソの復元には先に述べたように科学的、あるいは社会的な問題も多く、広範なコンセンサスと協力を得ることが重要である。これらの点からも、しれとこ100平方メートル運動の中で彼らの復元を取り上げることは、運動地の生物復元にとどまらず、日本における彼らの復元という観点からも意義があり、その出発点の地域として相応しいと思われる。

さらに、知床半島は現在、北海道で初めての世界自然遺産の候補地として推薦されている。これは言うまでもなく、知床半島一帯の自然が他には見られない原始性を強く残していることに基づいている。しかし、その知床にオオカミやカワウソがいないことは、この自然が本来あるべき冠を失ったままのものであることを示している。知床の自然が真に世界自然遺産に相応しいものになるためにも、これらターミナルアニマルの復元は不可欠なのではないかと思われる。長い論議の末にオオカミを復元させたアメリカのイエローストーンがそうであるように、これらの絶滅種の復元によって知床の自然はさらに多くの人々の心を強く

引きつけ、末長く続くものになり得るだろう。

おわりに

絶滅動物、とくに肉食獣の再導入の是非は、現状で直ちに可能か否か、あるいは妥当か否かで論じられがちのようである。欧米における再導入の場合も、当初の多くの反対意見はここから出されている。しかしそれらが実現に至ったのは、論議が科学的検討に基づく自然条件や社会的条件の整備の問題と平行して進められた結果であった。

しれとこ100平方メートル運動からのオオカミ、カワウソ復元の論議の立ち上げも、ここで述べたとおり、これを直ちに独断で実施すると主張しているものではない。絶滅種復元の意義を考えた上で、しれとこ100平方メートル運動の趣旨と歩みを踏まえ、さらにその運動地をとりまく知床半島の自然の世界自然遺産登録を視野に入れた、今後に向けての呼びかけである。森林再生専門委員会のこれまでの検討結果や集められた資料が、今後のより広い範囲の論議に役立てられ、日本における自然保護の新しいステップとして行政を含めた検討の段階へと進んでゆくことを願って止まない。

引用文献

- Beschta R. L. 2003. Cottonwoods, elk, and wolves in the Lamar Valley of Yellowstone National Park. *Ecological Applications*13:1295-1309.
- 平岩米吉. 1981. 狼 その生態と歴史. 308pp. 池田書店, 東京.
- 北海道統計協会. 2003. 第110回北海道統計書 平成15年. pp.325. 北海道統計課, 札幌.
- 犬飼哲夫. 1947. 熊に斃れた人々ー痛ましき開拓の犠牲. 29pp. 鶴文庫, 札幌.
- 犬飼哲夫. 1975. 北方動物誌. 152pp. 北苑社, 札幌.
- 石城謙吉. 1983. 生態系の変貌. 北海道の資源ーその開発と保存. pp.27-28. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
- 石川幸男. 2005. 知床半島の植物の現状と世界自然遺産候補地推薦前後の状況、課題. 北海道の自然43: 29-36.
- 小林敬. 1980. 4 遺構. 斜里町教育委員会(編), オクシベツ川遺跡ー発掘調査報告書ー. pp.12-20. 知床博物館協力会, 斜里.
- Love J. A. 1988. The reintroduction of the white-tailed

- sea eagle to Scotland: 1975-1987. 48pp. Nature Conservancy Council, Peterborough, UK.
- Mech R. D. 1995. The Challenge and opportunity of Recovering Wolf Populations. *Conservation Biology*9 (2) :1-9.
- 守山弘. 1988. 人間選書122 自然を守るとはどのようなことか. 260pp. 農山漁村文化協会, 東京.
- 西本豊弘・佐藤孝雄. 1991. オタフク洞窟遺跡出土の動物遺体. 羅臼町教育委員会 (編), 羅臼町文化財報告14 オタフク岩遺跡 (第1地点・第2地点・洞窟). pp.247-264. 羅臼町教育委員会, 羅臼.
- 岡田秀明・鈴木正嗣・増田泰. 2000. エゾシカ. 斜里町立知床博物館 (編), しれとこライブラリー 2・知床の哺乳類I. pp.10-73. 北海道新聞社, 札幌.
- Reading R. P. & Clark T. W. 1996. Carnivore reintroductions: An interdisciplinary examination. In: Gittleman J. L. (ed.) , *Carnivore Behavior, Ecology and Evolution*. pp.296-336. Cornell Univ. Press, New York.
- Ripple W. J. & Beschta R. L. 2003. Wolf introduction, predation risk, and cottonwood recovery in Yellowstone National Park. *Forest Ecology and Management*184:299-313.
- 佐藤孝雄・上奈緒美. 1999. 北海道目梨郡羅臼町岬町・知円別川南岸遺跡出土の動物個体. 羅臼町教育委員会 (編), 羅臼町文化報告17 知円別川南岸遺跡. pp.1-11. 羅臼町教育委員会, 羅臼.
- しれとこ100平方メートル運動地森林再生専門委員会. 2003a. 「100平方メートル運動の森・トラスト」に係わる生物相復元事業-サクラマス湖上・産卵状況調査業務, 平成15年報告. 第二次復元生物検討結果報告. 28pp. (財)自然トピアしれとこ管理財団, 斜里.
- しれとこ100平方メートル運動地森林再生専門委員会. 2003b. 「100平方メートル運動の森・トラスト」第二次復元生物検討結果報告. 64pp. (財)自然トピアしれとこ管理財団, 斜里.
- Smith D. W., Peterson R. O. & Houston D. B. 2003. Yellowstone after wolves. *Bioscience*53:330-340.